

新たに淡路島で 弥生の鉄器拠点とみられる国内最大級の鍛冶工房跡が出土した舟木遺跡

2017.1.26. 朝刊各紙 淡路島 舟木遺跡の記事 ファイル インターネットより

◎ 読売新聞 淡路島で新たな鍛冶工房跡、弥生期建物跡と鉄器

兵庫県淡路市の弥生時代後期（2世紀中頃～3世紀初め）の舟木遺跡で、鉄製の工具などを作った鍛冶工房とみられる建物跡4棟と鉄器57点が見つかり、市教育委員会が25日、発表した。淡路島北部が、近畿に鉄器文化が広まっていく際の中継地や生産拠点として大きな役割を果たしていた可能性を示しているという。

遺跡は標高約150メートルの丘陵地にあり、推定面積は約40ヘクタール。

2009年に約6キロ先の弥生時代後期の五斗長垣内遺跡（淡路市）で工房跡12棟や鉄器が見つかり、舟木遺跡も生産地だった可能性が高いとして、昨年10月から尾根の7か所を発掘していた。今回確認されたのは竪穴建物跡4棟。3棟は直径

10メートル前後と通常の竪穴住居より大きく、うち1棟には炉の跡があった。周囲で鉄器も見つかっており、市教委はいずれも大型の鍛冶工房だったとみている。



◎ 朝日新聞 淡路・舟木遺跡、弥生鉄器の大産地か 工房が集中

兵庫県淡路市の舟木（ふなき）遺跡で弥生時代後期～終末期（2世紀中ごろ～3世紀初め）の鉄器などの工房とみられる建物跡4棟や鉄製品が見つかった。市教委などが25日発表した。市内の弥生期の鉄器工房跡は、南西約6キロにある五斗長垣内遺跡（国史跡）に続き2カ所目。市教委は、淡路島北部には「邪馬台国時代」まで鉄器工房が集中し、舟木遺跡がその中心だった可能性もあるとみている。

舟木遺跡は淡路島北部の標高約150～190メートルの丘陵部にある。昨年10月からの調査で複数の場所を幅約2メートルの溝状に発掘し、直径10メートル前後の大型とみられる円形の竪穴建物跡3棟と、一辺約4・5メートルで角が丸い隅丸方形（すみまるほうけい）の竪穴建物跡1棟を検出した。その中から刀子（とうす、ナイフ）や細長い針状の鉄器、鉄を加工した際に出た鉄片などの鉄製品計57点と、ハンマーとして使われた敲石（たたきいし）などが出土。円形建物跡の1棟では、鉄を木炭で熱し、床面が赤く変色した炉の跡も確認した。

弥生時代終末期の溝からは、祭祀（さいし）に使われたとみられる多量の土器、タコつぼ、ミニチュア土器なども見つかり、付近に祭殿や首長墓など特別な施設があった可能性があるという。

◆五斗長垣内遺跡では鉄器工房跡が12棟発見され、弥生時代では最大規模の鉄器生産遺跡として注目された。舟木遺跡の面積は五斗長垣内遺跡（約3ヘクタール）をはるかに上回る約40ヘクタール。住居群など多くの建物群もある可能性があり、市教委は来年度以降も発掘調査を続ける方針だ。

市教委社会教育課の伊藤幸幸課長は「発掘したのは舟木遺跡のごく一部。弥生時代後期、淡路島北部は近畿地方の一大鉄器生産地だった可能性があり、遺跡の実態解明をめざしたい」としている。

愛媛大東アジア古代鉄文化研究センターの村上恭通センター長は「ごく一部の発掘で工房や炉、多数の鉄器が出土したのを見ると、五斗長垣内遺跡よりも大規模な鉄器生産遺跡だった可能性が高い」と評価。

近畿の弥生時代遺跡に詳しい森岡秀人・奈良県立橿原考古学研究所共同研究員は「弥生時代、淡路島は大和（現在の奈良県）や河内（大阪府南部）にとって、西からの物資や情報の中継する『玄関口』だった。島北部で生産された鉄器は大和や河内、摂津（大阪府北部、兵庫県東南部）に運ばれたのでは」と推定する。



舟木遺跡の大型建物跡で見つかった炉の跡＝兵庫県淡路市、水野義則撮影



舟木遺跡から出土した工具とみられる鉄器（左）とナイフとみられる鉄器（右）＝兵庫県淡路市、水野義則撮影

## ◎ 毎日新聞 淡路・舟木遺跡 新たな大型の鉄器工房跡 国内最大級か

### 弥生時代後期 鉄製品57点と工房含む竪穴建物跡4棟発見

兵庫県淡路市教委は25日、弥生時代後期の舟木遺跡（同市舟木）から大型の鉄器工房跡を確認したと発表した。遺跡中心部の状況を把握するため狭い範囲で溝（トレンチ）を掘って調査した結果、鉄製品57点と工房を含む竪穴建物跡4棟が見つかった。同遺跡全体の鉄器工房の規模が、南西約6キロにある国内最大級の鉄器生産集落で国史跡の五斗長垣内（ごっさかいと）遺跡（同市黒谷）をしのご可能性があるとしている。舟木遺跡は約40ヘクタールの大規模な山間地集落遺跡。これまでに約5700平方メートルを調査し、弥生時代後期の竪穴建物跡10棟や土器、中国鏡の破片が出土しているが、鉄器工房は確認されていなかった。

2016年度は遺跡中心部の尾根沿いに7本の溝、計128平方メートルを掘り、弥生時代後期後半（2世紀後半）の竪穴建物跡4棟を確認した。3棟は直径10メートル前後の大規模な円形で、うち1棟から床が赤く焼けた炉跡4カ所が見つかった。もう1棟は四隅が丸い隅丸方形建物だった。

鉄製品は破片を含む57点で、明確な用途は分かっていないが、鍛冶に関連したものと、工具とみられる針状のものなど。鉄の加工に使った台石や砥石（といし）など石製工具42点や、祭事用と考えられる弥生時代終末期（3世紀初頭）の土器も出土した。市教委は、建物跡は鉄器生産工房と、鉄工具を使用した何らかの生産工房で、大規模な工房群の存在も想定できるとみている。

淡路島北部には弥生時代後期の遺跡群が集中。3ヘクタールの五斗長垣内遺跡からは127点の鉄製品が見つかった。同遺跡では終末期の土器は出土しておらず、同遺跡の消滅後も鉄器生産を続ける集落が存在していたことが裏付けられたとしている。市教委は「淡路島北部が鉄器の製作や保有で近畿でも極めて重要な地域だったのではないかとみており、「古事記」で国生みの地として伝わる淡路の古代史を究明するため、舟木遺跡の重点調査を続ける。

## ◎ 神戸新聞 Next

### 近畿最大？淡路に鉄器工房跡 弥生時代の舟木遺跡 2017/1/25 20:30

兵庫県淡路市舟木にある弥生時代の山間地集落遺跡「舟木遺跡」の発掘調査で、新たに鉄器生産工房跡と、手工業品を生産した可能性のある工房跡、鉄器57点などが見つかった。兵庫県と同市の両教育委員会が25日発表した。

過去に同市で見つかった近畿最大の鉄器生産遺跡「五斗長垣内遺跡」（同市黒谷）を上回る規模と推定され、専門家は「弥生時代、淡路島が鉄器の製作や保有の地として有力視されていたことを裏付ける発見だ」と指摘する。

同時に出土した土器の年代から、工房があったのは2世紀後半とみられる。

見つかったのは4棟の大型の竪穴建物跡。うち3棟は敷地が円形で直径が10メートルを超える大型で、うち1棟から4基の炉の跡が確認された。柱が外側に寄り中央部が広いことから、作業をする空間だったと想定される。

また4棟全てから鉄器製作に使ったとみられる石器を多数発見。鉄器は計57点あり、鍛冶関連のほかに針状鉄器など小型工具が出土した。

針状鉄器は小さいものでは長さ4ミリ、幅1ミリで、愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センターの村上恭通センター長は「小型工具を使って何らかの手工業品を生産する大規模な工房群が存在した可能性がある」と指摘する。作られた物は出土していないが、木製品や皮革製品などが想定できるという。

2009年に工房12棟と鉄器127点が見つかった五斗長垣内遺跡では、鉄鏃（てつぞく）（矢尻）などの武器類が多く出土した一方、舟木では明確に武器と認められるものはなかった。二つの集落はわずか約6キロの距離でほぼ同時期に存在していたが、生産物に違いがあることが判明。五斗長垣内が消滅した後も舟木で鉄器生産が続けられていたことも分かった。（切貫滋巨）

**【舟木遺跡】** 弥生時代後期～末期（1世紀～3世紀初頭）に存在したとみられ、

1966（昭和41）年に発見された。面積は推定約40万平方メートル。

91年の調査で見つかった出土物が、古代の中国で製作された青銅製の中国鏡の破片であることが明らかになっていた。



炉の跡が確認された工房の遺構。

土が赤っぽく焼けている

＝淡路市舟木（撮影・内田世紀）



近畿で最大規模とみられる鉄器生産跡が見つかった舟木遺跡周辺。現場は木々に囲まれている

＝淡路市舟木（撮影・内田世紀）